

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 2003-313120

(43)Date of publication of application : 06.11.2003

(51)Int.Cl.

A61K 9/48
A23L 1/00
A61K 47/36
A61K 47/44
// A23L 1/30

(21)Application number : 2002-119406

(71)Applicant : FANCL CORP

(22)Date of filing : 22.04.2002

(72)Inventor : TAKAI YOSHIMITSU

NISHIKAWA KAZUYOSHI

NARUSHIMA MASATO

(54) CAPSULE FORM FOOD COMPOSITION

(57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide an excellent capsule preparation which can prevent the development of the smell of a charged ingredient.

SOLUTION: A capsule form oral composition contains a smelling ingredient or a volatile substance-containing ingredient in capsules using pullulan as a capsule base material. The capsule preferably further contains a thickening stabilizer, wherein the thickening stabilizer is one or more substances selected from gum Arabic, alginic acid, carrageenan, karaya gum, xanthan gum, guar gum, tamarind seed gum, tragacanth gum, and the like.

LEGAL STATUS

[Date of request for examination] 07.04.2005

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's
decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's
decision of rejection]

[Date of extinction of right]

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2003-313120

(P2003-313120A)

(43)公開日 平成15年11月6日 (2003.11.6)

(51)Int.Cl. ⁷	識別記号	F I	デマコト ⁸ (参考)
A 6 1 K 9/48		A 6 1 K 9/48	4 B 0 1 8
A 2 3 L 1/00		A 2 3 L 1/00	C 4 B 0 3 6
A 6 1 K 47/36		A 6 1 K 47/36	4 C 0 7 6
47/44		47/44	
// A 2 3 L 1/30		A 2 3 L 1/30	B
		審査請求 未請求 請求項の数 2	OL (全 8 頁)

(21)出願番号 特願2002-119406(P2002-119406)

(22)出願日 平成14年4月22日 (2002.4.22)

(71)出願人 593106918
株式会社ファンケル
神奈川県横浜市栄区飯島町109番地1
(72)発明者 高井 良充
神奈川県横浜市戸塚区上品濃12番13号 株
式会社ファンケル中央研究所内
(72)発明者 西川 一好
神奈川県横浜市戸塚区上品濃12番13号 株
式会社ファンケル中央研究所内
(74)代理人 100108590
弁理士 佐伯 とも子

最終頁に続く

(54)【発明の名称】 カプセル形態の食品用組成物

(57)【要約】

【課題】 充填される成分の臭いの発生を抑制するこ
とができる優れたカプセル製剤を提供すること。
【解決手段】 有臭性成分又は揮発性物質含有成分
を、ブルランをカプセル基剤とするカプセルに含むカプ
セル形態の経口用組成物、カプセルが増粘安定剤をさら
に含み、増粘安定剤が、アラビアガム、アルギン酸、カ
ラギーナン、カラヤガム、キサンタンガム、グアーガ
ム、タマリンドシードガム、タラガム、及びトラガント
ガム等から選択される1種、または2種以上であること
を特徴とする経口用組成物。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 有臭性成分又は揮発性物質含有成分を、
 プルランをカプセル基剤とするカプセルに含むカプセル
 形態の経口用組成物。

【請求項2】 カプセルが増粘安定剤をさらに含み、増
 粘安定剤が、アラビアガム、アルギン酸、カラギーナ
 ン、カラヤガム、キサンタンガム、グアーガム、タマリ
 ンドシードガム、タラガム、及びトラガントガム等から
 選択される1種、または2種以上であることを特徴とする
 請求項1記載の経口用組成物。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明が属する技術分野】本発明は、カプセル剤のカプ
 セル基剤特有の臭いが無く、充填された粉末、顆粒、液体
 のような形態の有臭性成分の臭いの発生、および揮散
 性成分における揮発性物質の揮散が抑制された食品に適
 したカプセル剤に関する。

【0002】

【従来の技術】従来、ソフトカプセル、又はハードカプ
 セルは、ゼラチン等を基剤として、グリセリン等の可塑
 剤、不透明化剤、染料等を配合した皮膜組成物から形成
 されている。しかしながら、カプセル基剤にゼラチンを
 用いた場合、製造したカプセル剤より、ゼラチン特有の
 不快な臭いが発生することが問題視されていた。

【0003】このような問題を解決する先行技術として
 は、特開平6-1116139号公報に記載されている技
 術が知られているが、カプセル基剤として、前述のゼラ
 チン、もしくは食品添加物として認可を受けていないヒ
 ドロキシプロピルメチルセルロースが使用されており、
 また、この技術は、グリチルリチン酸、サッカリン、ア
 スパルテーム、ステビア、およびスクラロース等の甘味
 剤をカプセル基剤中に含有させることによる不快な味の
 マスキング技術であって、不快な臭いを抑制する技術と
 して開示されているのではない。

【0004】また、特開2001-114670に記載
 されている技術についても、カプセル基剤として、前述
 のヒドロキシプロピルメチルセルロースが使用されてお
 り、また、その場合、カプセル被膜の酸素透過性が高い
 ために、粉末活性成分が酸化されてしまうことが問題視
 されている。

【0005】ところで、臭いのある粉末活性成分を含有
 させたカプセル剤を製造する場合、カプセル基剤特有の
 不快な臭いとは別に、カプセルに充填された粉末自体か
 ら発する不快な臭いが問題となる場合がある。このよう
 な問題は、不活性成分を增量することによって抑制され
 ることがあるが、不活性成分を增量すると、一日当たり
 に摂取する量は非常に多くなってしまう。

【0006】このような問題を解決する先行技術として
 は、特開昭56-20509号公報、特開昭60-32
 714号公報、特開平4-356420号公報等が知ら

れているが、ヒドロキシプロピルセルロース、ヒドロキ
 シエチルセルロース、ヒドロキシプロピルメチルセルロ
 ース、ステアリン酸、パルミチン酸、ラウリン酸、ポリ
 オキシエチレンソルビタン脂肪酸エステル、ポリオキシ
 エチレンアルキルエーテル等の食品添加物として認可さ
 れていない物質の使用が必須となるため、健康食品のよ
 うな食品としてのカプセルに使用する技術としては適し
 ていない。また、特表2001-523718に記載の
 技術では、臭いをマスキングするために、新たにコーテ
 ィングを施すというものであり、カプセルにさらにコー
 ティングするという工程を必要とし、製造方法としての
 簡便さに欠ける。

【0007】特に、カプセル基剤にゼラチンを用いて有
 臭性粉末成分を充填した場合には、40°C、75%RH
 条件下での加速試験を行うと、数日後には、前記ゼラチ
 ン特有の不快な臭いと、さらに充填末の不快な臭いとが
 相俟って、異臭と感じられることから、このような問題
 を解決するための手段が望まれていた。

【0008】

【発明が解決しようとする課題】本発明は、カプセル剤
 のカプセル基剤特有の臭い、および有臭性充填末の臭い
 の発生が抑制されたカプセル剤を提供することを目的と
 する。さらに、揮発性物質をカプセルに含有させた場合
 には、揮発性物質の揮発を抑制することができるカプセル
 剤を提供することを目的とする。

【0009】

【課題を解決するための手段】本発明者は、カプセル剤
 を製造する際に、カプセル基剤として、従来のゼラチン
 等の代わりに、プルランを基剤とするカプセルを使用す
 ることによって、カプセル基剤特有の臭い、および有臭
 性成分、特に、不快臭成分の臭い、さらに、これらの混
 合臭の発生を抑制できることを見出し、本発明に至った。

【0010】即ち、本発明は、

1. 有臭性成分又は揮発性物質含有成分を、プルランを
 カプセル基剤とするカプセルに含むカプセル形態の経口
 用組成物、および
2. カプセルが増粘安定剤をさらに含み、増粘安定剤
 が、アラビアガム、アルギン酸、カラギーナン、カラヤ
 ガム、キサンタンガム、グアーガム、タマリンドシード
 ガム、タラガム、及びトラガントガム等から選択される
 1種、または2種以上であることを特徴とする1記載の
 経口用組成物、に関する。

【0011】このような経口用組成物は、臭い、特に、
 経口投与に当たって問題となる不快臭を抑制した、又は
 有効な揮発性物質の揮散を抑制した組成物として提供す
 ることができる。

【0012】

【発明の実施の形態】以下に本発明を詳細に説明する。
 本発明のカプセル基剤として用いるプルランは、マルト

トリオースが α -1, 6結合した天然の中性多糖類である。一般的に、澱粉部分分解物を炭素源とし、有機・無機窒素源、および無機塩類を含んだ培地で、黒酵母の1種であるAureobasidium pullulansを培養し、菌体外に產生される多糖類を分離、精製することによって得られる。プルランを基剤とするカプセルは、ガスバリア性に優れ、しかも無味無臭であり、食品組成物のカプセルとして優れた性質を有する。

【0013】カプセルは、プルランを基剤とし、増粘安定剤（ゲル化剤）を添加して製造される。増粘安定剤として、親水コロイドであり、水に溶解または分散して粘稠性を生じる、アラビアガム、アルギン酸、カラギーナン、ゲラン、カラヤガム、キサンタンガム、グアーガム、タマリンドシードガム、タラガム、トラガントガム等の高分子物質を使用する。増粘安定剤は、0.01～5質量%配合できる。このような高分子物質は、ここに列挙した限りではないが、好ましくは、食品添加物、もしくは食品として認可を受けている前記高分子物質、特に好ましくは、アラビアガム、カラギーナン、キサンタンガムから選択される1種、または2種以上である。

【0014】このような高分子物質は、具体的には以下のようにして製造される。例えば、アラビアガムは、一般的に、マメ科アラビアガムノキ、またはその他の同族植物の分泌液を乾燥するか、それを脱塩後、粉末化することによって得られる。アルギン酸は、一般的に、褐藻類の水洗い後、粉化し、酸処理、抽出、ろ過、凝固を行い、析出したアルギン酸を精製、乾燥、粉末化して得られる。

【0015】カラギーナンは、一般的に、スギノリ科アリッッシュモス、スギノリ、ミリン科キリンサイ、イバラノリ科カギイバラノリ等の葉を抽出後、粉末化することによって得られる。カラヤガムは、一般的に、アオギリ科カラヤ、またはベニノキ科キバナワタモドキの幹枝の分泌液を乾燥後、粉末化することによって得られる。

【0016】キサンタンガムは、一般的に、グルコースと無機塩を含有した培地を、pH 6.0～7.0に調整し、グラム陰性細菌スターーを1～5%加え、50～100時間培養する。得られた液体を殺菌後、イソプロピルアルコールを加えて沈殿させ、精製、粉末化して得られる。

【0017】グアーガムは、一般的に、マメ科グアーの種子の胚乳部分を粉碎するか、または热水抽出した後、粉末化することによって得られる。タマリンドシードガムは、一般的に、マメ科タマリンドの種子の胚乳部分より、热水抽出、もしくはアルカリ性水溶液で抽出した後、粉末化することによって得られる。タラガムは、一般的に、マメ科タラの種子の胚乳部分を粉碎するか、または热水抽出した後、粉末化することによって得られる。トラガントガムは、一般的に、マメ科トラガントの分泌液を乾燥後、粉末化することによって得られる。

【0018】プルランを基剤とするカプセルは、例えば、ハードカプセルの場合、国際公開WO 01/07507号パンフレットに記載の方法で製造できる。カプセルの皮膜形成組成物であるプルラン溶液は、さらに、カチオン含有塩を含むのが好ましい。プルラン溶液は、プルラン濃度10～60質量%、好ましくは、10～50質量%、より好ましくは、10～40質量%である。多糖類としては、 κ -カラギーナン、ゲラン、アラビアガム、キサンタンガムなどが好ましい。親水コロイドである多糖類（ゲル化剤）の量は、0.01～5質量%が好ましく、0.03～1質量%がより好ましい。カチオンは、ゲル化剤の硬化力を強化し、好ましい塩としては、K、Li、Na、NH₄、Ca、Mgのようなカチオンを含むものである。カチオンの量は、プルラン水溶液中、好ましくは3%未満、特に、0.01～1質量%である。

【0019】プルラン溶液は、好ましい態様として、金属イオン封鎖剤を含む。金属イオン封鎖剤は、エチレンジアミン四酢酸、酢酸、クエン酸又はその塩が好ましく使用でき、より具体的に例示すると、酢酸ナトリウム、酢酸カリウム、エチレンジアミン四酢酸二ナトリウム等である。この量は、好ましくは溶液中3質量%未満、0.01～1質量%である。

【0020】さらに、プルラン溶液は、医薬又は食品用に使用できる界面活性剤を添加することが好ましい。好ましい濃度は、0.01～3%である。界面活性剤を使用する場合、ゲル化剤として、溶液中0.05～3%の濃度の κ -カラギーナン、アラビアガム、キサンタンガムを用いるのが好ましい。界面活性剤としては、カチオン性、アニオン性、非イオン性のものをいずれも使用することができ、ラウリル硫酸ナトリウム（SLS）、ポリオキシエチレンソルビタン脂肪酸エステル、ソルビタンエステルなどを使用できる。より具体的には、ポリソルベート20、ポリソルベート80、ソルビタンラウリン酸エステル、ソルビタンオレイン酸エステルを挙げることができる。

【0021】本発明で使用するカプセルは、一般的な製造方法に準じて製造される。ハードカプセルの場合、例えば、まず、基剤であるプルランとアラビアガムの溶液に成形ピンを浸漬し、ピン上に基剤溶液を付着させる。次にそれを乾燥して、フィルムをピンより引き抜いた後、切断してキャップとボディーを嵌合させることによって製造できる。

【0022】カプセル剤に充填させる有臭性成分は、粉末、顆粒のような形状であることができ、液体であっても良い。例えば、有臭性成分としては、具体的には、以下のものを挙げることができる。マリアアザミ、ウコン、セージ、ジンジャー、紅麹、イソフラボン、桑の葉、ギムネマシルベスター、ソバ若葉、黒麹もろみ酢、ダッタンソバ、イチョウ葉、納豆菌、グルコサミン、コン

ドロイチン含有ムコ多糖たんぱく、キャッツクロー、コラーゲン、エゾウコギ、ブルーベリー、バレリアン、ホップ、米胚芽、セントジョーンズウォート、ノコギリヤシ、カボチャ、シソ、甜茶、ハトムギ、ルイボス茶、エキナセア、メリロート、ブエラリアミリフィカ、チエストツリー、ざくろ、ガルシニア、シトラスアウランチウム、クローブ、トウガラシ、センテラアジアチカ、ブドウ、ミレット、ホーステイル、大麦若葉、トマト、タマネギ、バジル、ケール、アシタバ、ローズマリー、タイム、ブロッコリー、パセリ、アヤムラサキ、セロリ、アガリクス草、まいたけ、高麗人参、にんにく、キダチアロエ、ローヤルゼリー、バナバ、クランベリー、カティン、田七人参、ブラックコホシュ、マカ、ウメ、エルダーベリー、セイヨウシロヤナギ、カモミール、オーツ麦、ガラナ、アシュワガンダ、コラ、アイブライト、アスパラガスラケモスス、昆布、緑茶等の天然由来の活性成分を使用することができる。これら活性成分は、果実、種子、葉等の粉碎物、または果実、種子、葉等からエタノール水溶液等により抽出した抽出液、またはそれを分離濃縮し、必要に応じて賦形剤等の添加剤を配合して乾燥することによって得られるもので、その製造方法によらず、市販品を使用することができる。

【0023】有臭性の生薬としては、人参（ウコギ科のニンジン、Panax ginseng C.A. Mey.の根を乾燥したもの）、黄精（ユリ科 カギクルマバナルコユリ、Polygonatum sibiricum Red.の根茎）、阿膠（アキヨウ、ウマコロバ、Equus asinus L.の除毛した皮を煮詰めて製造したニカラ）、枸杞子（ナス科クコの成熟した果実を乾燥したもの）、反鼻（クサリヘビ科のマムシの内臓を取出し、皮を剥いで長く伸ばして乾燥したもの）、山茱（サンヤク、ヤマノイモ科ナガイモの塊状根を乾燥したもの）、大棗（タイソウ、クロウメモドキ科サネブトナツメおよび同属植物の成熟果実を乾燥したもの）、桑椹（ソウジン、クワ科マクワの成熟した果実）、紅花（コウカ、キク科ベニバナの花冠を乾燥したもの）、桂皮、鬱金（ウコン、ショウガ科ウコン、ハルウコンの塊根を乾燥したもの）、酸棗仁（サンソウニン、クロウメモドキ科サネブトナツメの成熟種子を乾燥したもの）、竜眼肉（ムクロジ科リュウガンの果肉）、陳皮（チンピ、ミカン科柑桔の果皮を乾燥したもの）、海馬（カイバ、ヨウジウオ科オオタツおよび斑海馬の内臓を除き乾燥したもの）、冬虫夏草（トウチュウカソウ、バッカクキン科フュムシナツクサタケ、Cordyceps sinensis (Berk.) Sacc.の子実体及び菌核）、胡芦巴（コロハ、マメ科コロハの種子）、山茱萸（サンシュユ、ミズキ科サンシュユの果実を乾燥したもの）等の市販品を使用することができる。漢方処方により、上記生薬を配合したものとして使用することもできる。これらの生薬は、その形態や剤型に応じて、粉碎したもの、さらにその粉末を使用したり、アルコールや熱水などにより抽出した抽出液、また

はその抽出エキスを乾燥したものを粉末にした、抽出エキス粉末として使用することができる。

【0024】本発明における成分としては、亜鉛酵母、クロム酵母、セレン酵母、マンガン酵母、銅酵母、モリブデン酵母、ヘム鉄等のミネラル粉末活性成分を使用することができる。さらに、ビール酵母、パン酵母エキス等の酵母粉末活性成分を使用することもできる。

【0025】本発明における成分として、塩酸チアミン、硝酸チアミン、硝酸ビスチアミン、塩酸ジセチアミン、ジベンゾイルチアミンジベンゾイルチアミン塩酸塩、チアミンセチル硫酸塩、チアミンチオシアン酸塩、チアミンナフタレン-1,5-ジスルホン酸塩、チアミンラウリル硫酸塩等のビタミンB1類、リボフラビン、リボ酸リボフラビンナトリウム等のビタミンB2類、ニコチン酸、ニコチン酸アミド等のニコチン酸類、バーム油カロチン、デュナリエラカロチン、クリプトキサンチン、ゼアキサンチン、カンタキサンチン、β-アポ-8'-カロテナール、ビキシン、リコペン等のカロチノイド系化合物等のビタミン成分を使用することができる。

【0026】また、本発明におけるその他の活性成分としては、ビフィズス菌、ラクチュロース、ラフィノース等のオリゴ糖、有胞子性乳酸菌、フェシウム菌、ガッセリ菌等の乳酸菌、乳たんぱく、ヒアルロン酸、シルクペプチド、赤ワインエキス、クロレラ、スピルリナ、DHA（ドコサヘキサエン酸含有精製魚油）、EPA（エイコサペンタエン酸含有精製魚油）、スクワレン、キトサン、プロテイン、サケ白子、プロポリス、ラクトフェリン等の粉末化された、または液体の市販品を使用することができる。

【0027】有臭性成分のうち、ジンジャー、納豆菌、グルコサミン、コンドロイチン含有ムコ多糖たんぱく、コラーゲン、エゾウコギ、バレリアン、セントジョーンズウォート、タマネギ、ローズマリー、タイム、にんにく、ローヤルゼリー、マカ、亜鉛酵母、クロム酵母、セレン酵母、マンガン酵母、銅酵母、モリブデン酵母、ヘム鉄、ビール酵母、パン酵母エキス、前記ビタミンB1類、クロレラ、スピルリナ、DHA、EPA、プロポリス、紅麹、ビフィズス菌末、まいたけ、高麗人参、前記カロチノイド系化合物、ブドウ、ミレット、ホーステイル、イチョウ葉、シソ、甜茶、ルイボス茶、ハトムギ、ブルーベリー、ノコギリヤシ等に対しては、本発明の実施が特に有効である。

【0028】特に、不快臭成分をカプセルに含有させたカプセル形態の経口用組成物を提供する場合には、カプセルに含有されている成分の臭いがカプセルの外に漏れにくいため、経口投与に当たっての不快な臭いの発生を抑制することができ、さらに、カプセル自体の臭いもないでの、不快臭成分とゼラチンカプセルのようなカプセル自体の臭いとの混合臭の発生も防止されるため、好適である。

【0029】尚、本発明においては、活性成分を2種以上用いることができる。また、本発明によれば、前記有臭性成分の他に、特に臭いを発生しない活性成分を用いても、カプセル基剤特有の臭いを発生することが無いため、問題ない。

【0030】次に、揮発性物質を含む揮発性成分をカプセルに充填することにより、揮発性物質の揮発を抑制することができ、揮発性成分を安定的に配合したカプセルとすることができる。このような揮発性成分としては、例えば、ラベンダー、ローマンカモミール、ローズウッド、スィートマージョラム、ネロリ、アチグレン、リンドン、バーベナ、メリッサ、ミルラ、フランキンセンス、サンダルウッド、ペパーミント、レモン、ローズマリー、ベルガモット、サイプレス、ジュニパー、バーチ、ウインターグリーン、アンジェリカ、イランイラン、クラリセージ、ジャスミン、ローズ、ゼラニウム、スィートオレンジ、マンダリン、レモングラス、グレープフルーツ、スィートフェンネル、コリアンダー、バジル、ティートリー、ユーカリベルガモット、ニアウリ、カユアチ、ライム、ハッカ、アップル等のハーブ類、ヒノキチオール、わさび抽出物やからし抽出物等や、それらの有効成分であるイソチオシアノ酸アリル、イソチオシアノ酸ブチル等の抗腫瘍保持剤等を挙げることができ、それらは抽出オイルであっても、粉末化されたものであっても良い。

【0031】本発明のカプセルに配合する活性成分としては、0.1～100質量%、好ましくは1～95質量%、特に好ましくは5～90質量%配合する。

【0032】本発明においては、カプセルに含有させる組成物中に活性成分以外に製造性を高める目的で、下記のような不活性成分を含有させることもできる。本発明における不活性成分としては、デキストリン、小麦澱粉、米澱粉、とうもろこし澱粉、馬鈴薯澱粉、 α 化澱粉、部分 α 化澱粉、タピオカ澱粉、とうもろこしたんぱく、乳糖、麦芽糖、還元乳糖、還元麦芽糖、ソルビトール、マンニトール、エリスリトール、キシリトール、トレハロース、白糖、ブドウ糖、グアーガム、キサンタンガム、アルギン酸ナトリウム、アラビアガム、トラガントガム、ブルラン、カラギーナン、寒天、ゼラチン、大豆食物纖維、結晶セルロース、メチルセルロース、エチルセルロース、低置換度ヒドロキシプロビルセルロース、ヒドロキシプロビルメチルセルロース、ヒドロキシプロビルメチルセルロースフタレート、ヒドロキシプロビルメチルセルロースアセテートサクシネット、カルボキシメチルエチルセルロース、酢酸タル酸セルロース、ヒドロキシエチルセルロース、ヒドロキシプロビルスター、ポリビニルビロリドン、カルメロース、カルメロースカルシウム、カルメロースナトリウム、クロスカルメロースナトリウム、カルボキシメチルスター、ナトリウム、植物硬化油、植物油脂末、カルナウバロウ、

カカオ脂末、ショ糖脂肪酸エステル、ステアリン酸、ステアリン酸マグネシウム、ステアリン酸アルミニウム、ステアリン酸カルシウム、二酸化ケイ素、タルク、ケイ酸アルミニウム、リン酸水素カルシウム、ドロマイド、卵殻カルシウム、帆立貝殻カルシウム、カキ貝殻カルシウム、珊瑚カルシウム、ウニ殻カルシウム、石化海藻カルシウム、真珠カルシウム、牛骨カルシウム、魚骨粉カルシウム、魚鱗片カルシウム、ミルクカルシウム等の焼成カルシウム、未焼成カルシウム等、炭酸カルシウム、リン酸カルシウム、乳酸カルシウム、グルコン酸カルシウム、クエン酸カルシウム、塩化カルシウム、グリセリン、シェラック等の食品業界や医薬品業界において使用可能なすべての市販品を挙げができる。

【0033】カプセル形態として、ハードカプセルの形態で提供することができ、その形状および重量に左右されることはなく、これらは一般的な製造方法に準じて製造される。例えば、活性成分をそのまま常法に従ってカプセル充填するか、または、活性成分が粉末の場合、これを適当な方法で顆粒状とした後、常法に従ってカプセル充填して製造することができる。必要に応じて、不活性成分は混合する際に加えても、前記粉末活性成分を顆粒状にする際に使用しても良く、その場合、不活性成分は2種以上併用してもかまわない。また、製剤化適性を向上させる目的で、製剤化前に適切な粒子径になるよう粉碎、または篩過等を施す場合もある。カプセルは、腸溶性や徐放性といった特別の機能を付与する目的で、活性成分を充填した後に、ハードカプセルに適当なコーティングを施しても良い。

【0034】また、ソフトカプセルの形態でも提供され、その形状および重量に左右されることなく、これらは一般的な製造方法に準じて製造される。例えば、油性液体に半固体もしくは固体の分散剤や乳化剤等のワックス類を添加した後、40～80℃に加温溶解させる。次に、活性成分を加えた後、最終的に油性懸濁液の温度を25～35℃前後に冷却してペースト状にする。この懸濁液を常温の状態でソフトカプセルへ充填する。

【0035】ここで使用する油性液体としては特に制限はなく、小麦胚芽油、サラダ油、ぶどう種子油、オリーブ油、紅花油、しそ油、落花生油、ごま油、中鎖脂肪酸トリグリセリド、ポラージ油、大豆油、DHA（ドコサヘキサエン酸含有精製魚油）、EPA（エイコサペンタエン酸含有精製魚油）、肝油、アボガド油、月見草油、卵黄油、米油、オクタコサノール、プロポリス等の食用に供される通常の油であれば何等差し支えない。油性液体は、ソフトカプセル剤において、好ましくは30～48質量%、さらに好ましくは、37～43質量%含有させることができる。

【0036】ソフトカプセル内の分離を防止するために添加するワックスとしては、ミツロウ、ショ糖脂肪酸エステル、グリセリン脂肪酸エステル、ソルビタン脂肪酸

エステル、プロピレングリコール脂肪酸エステル、菜種水素添加油、サフラワー水素添加油、パーム水素添加油、シトステロール、スチグマステロール、カンペステロール、ブリシカステロール、カカオ脂粉末、カルナウバロウ、ライスワックス、モクロウ、パラフィン等の食品業界や医薬品業界において使用可能なすべてのワックスを挙げることができる。ただし、これらワックス類、あるいはレシチンには、乳化剤的性質があるため、油性懸濁液に添加することによって、油性懸濁液の粘度を抑制することができる。

【0037】尚、このようにソフトカプセルの形態として提供する場合には、有臭性の大豆油、DHA、EPA、プロポリス等は、粉末化されたものを使用する必要はなく、油性液体として配合することによって、活性成分含量を高めることができる。

【0038】本発明により提供される、カプセル形態の経口用組成物は、特に、食品組成物として提供する場合、カプセル成分として、ゼラチンのようなタンパク質を含まないため、安定な品質の無タンパク質健康食品、ゼラチンフリー健康食品として提供することができる。経口用組成物は、医薬組成物としても適しており、医薬成分の不快臭の発生を抑制することにより、患者にとって、飲みやすいカプセル製剤を提供することができる。

【0039】

【実施例】以下に本発明の実施例を示すが、本発明はこれらのみに限定されるものではない。【カプセルの製造例】カプセルの製造方法としては、国際公開WO01/07507号パンフレットに記載のものを使用でき、それは、次のとおりである。プルラン (P1-20) 粉末 1.0 kg を κ-カラギーナン 10 g と混合する。室温で攪拌しながら脱イオン水 4.0 kg に、酢酸カリウム 20 g (溶液中 0.2 質量%) を加え、次いで、上記混合物 (溶液中プルラン 20 質量%、κ-カラギーナン 0.2 質量%) を添加する。粉末の添加速度、攪拌速度は、かたまりの生成を防ぐために迅速に行う必要がある。かたまりができると溶解するのに長時間を要する。溶液を、攪拌しながら κ-カラギーナンとプルランを完全に溶解させるまで 70°C まで加熱する。これらの成分は 70°C で直ちに溶解することもできるが、プルランが固まる傾向がより強くなってしまう。

【0040】このように調製したプルラン溶液は、徐々に攪拌しながら泡を除き、次に通常のハードゼラチンカプセル製造設備のパイロットマシンの浸漬槽に流し込む。浸漬プルラン溶液を 60°C に保つと、通常のプロセスに従って、通常のハードゼラチンカプセルと同じ寸法明細のサイズの天然の透明ハードプルランカプセルが製造できた。

【0041】下記実施例 1～3 及び比較例 1～3 のハードカプセル充填物を使用して評価試験を行った。実施例 1～3 において、ハードカプセルとしては、プルランを

カプセル基剤として、それにアラビアガムを配合してなるハードカプセルを用いた。

【0042】【実施例 1】グルコサミンを 60 kg、コンドロイチン含有ムコ多糖たんぱくを 15 kg、結晶セルロースを 10 kg、乳糖を 10 kg、植物油脂末を 5 kg 加え、5 分間 V 型混合機で混合した。次に、カプセル充填機 GKF type (ACF-20) を使用し、この混合物を所定充填量として 300 mg になるように、15 rpm の速度で、本発明のハードカプセルに充填した。

【0043】【実施例 2】セントジョンズウォートエキス粉末を 40 kg、結晶セルロースを 30 kg、とうもろこし澱粉を 25 kg、植物油脂末を 5 kg 加え、5 分間 V 型混合機で混合した。次に、カプセル充填機 GKF type (ACF-20) を使用し、この混合物を所定充填量として 260 mg になるように、15 rpm の速度で、本発明のハードカプセルに充填した。

【0044】【実施例 3】にんにくエキス粉末を 50 kg、結晶セルロースを 25 kg、とうもろこし澱粉を 20 kg、植物油脂末を 5 kg 加え、5 分間 V 型混合機で混合した。次に、カプセル充填機 GKF type (ACF-20) を使用し、この混合物を所定充填量として 250 mg になるように、15 rpm の速度で、本発明のハードカプセルに充填した。

【0045】【比較例 1】ヒドロキシプロピルメチルセルロースをカプセル基剤としたハードカプセルを用いたこと以外は、実施例 1 と同様にしてハードカプセル剤を製造した。

【0046】【比較例 2】ゼラチンをカプセル基剤としたハードカプセルを用いたこと以外は、実施例 2 と同様にしてハードカプセル剤を製造した。

【0047】【比較例 3】ゼラチンをカプセル基剤としたハードカプセルを用いたこと以外は、実施例 3 と同様にしてハードカプセル剤を製造した。

【0048】【官能検査】上記実施例 1、2、3、および比較例 1、2、3 のハードカプセル剤をそれぞれ小型プラスチック容器に入れ、40°C、75%RH の恒温槽にて保存した。経時的にハードカプセル剤の臭いを、健常成人男子 6 名によって、検査した。評価基準として、保存前と比べて変化無し：0、ほとんど同じ：-1、やや臭いがする：-2、かなり臭いがする：-3、非常に不快な臭いがする：-4、とした。結果を表 1 に示す。

【0049】

【表 1】

表 1 保存後の臭い評価結果

例番号	評価
実施例 1	0
実施例 2	0
実施例 3	-1
比較例 1	-2
比較例 2	-3
比較例 3	-4

【0050】40℃、75%RHに72時間保存後の状態は、表1の通り、実施例1、2では、0（保存前と比べて変化が無し）という結果が得られた。また、実施例3についても、カプセル基剤特有の不快な臭いは認められなかったものの、にんにく由来の臭いが若干感じられた程度であり、判定としては、-1（ほとんど同じ）という結果であった。

【0051】一方、比較例1では、カプセル基剤特有の不快な臭いの発生は認められなかったものの、コンドロイチン含有ムコ多糖たんぱく由来の不快な臭いが認められ、判定結果としては、-2（やや臭いがする）であった。また、比較例2では、カプセル基剤のゼラチン、およびセントジョーンズウォートエキス粉末由来の臭いが相俟った不快な臭いが認められ、判定結果としては-3（かなり臭いがする）であった。さらに、比較例3に関しては、カプセル基剤のゼラチン、およびにんにく由来の臭いが相俟って、異臭と感じられ、判定結果としては、-4（非常に不快な臭いがする）であった。

【0052】【ガスクロマトグラフィーによる臭気の分析】40℃、75%RHの条件下、プラスチック容器に72時間保存後の組成物（実施例3および比較例3）についてプラスチック容器の空間部分の空気をサンプリングして、にんにくの臭気成分であるメチルアリルトリスルフィド、メチル-*n*-プロピルトリスルフィド、メチルアリルジスルフィドについてガスクロマトグラフィー法による分析を行うことにより、上記官能検査の結果を定量的に裏付けることができる。以下に処方例を示す。

【0053】【実施例4】揮発性成分としてラベンダーエキス粉末を用いて、常法に従って、ハードカプセルを製造した。具体的には、ラベンダーエキス粉末を40kg、結晶セルロースを30kg、とうもろこし澱粉を25kg、植物油脂末を5kg加え、5分間V型混合機で混合した。次に、カプセル充填機GKF type(ACF-20)を使用し、この混合物を所定充填量として220mgになるように、15rpmの速度で、本発明のハードカプセルに充填した。

【0054】【実施例5】揮発性成分としてペパーミントエキス粉末を用いて、常法に従って、ハードカプセルを製造した。具体的には、ペパーミントエキス粉末を40kg、結晶セルロースを30kg、とうもろこし澱粉を25kg、植物油脂末を5kg加え、5分間V型混合機で混合した。次に、カプセル充填機GKF type(ACF-20)を使用し、この混合物を所定充填量として200mgになるように、15rpmの速度で、本発明のハードカプセルに充填した。

【0055】【比較例4】ヒドロキシプロピルメチルセ

ルロースをカプセル基剤としたハードカプセルを用いたこと以外は、実施例4と同様にしてハードカプセル剤を製造した。

【0056】【比較例5】ゼラチンをカプセル基剤としたハードカプセルを用いたこと以外は、実施例5と同様にしてハードカプセル剤を製造した。

【0057】【官能検査】上記実施例4、5、および比較例4、5のハードカプセル剤をそれぞれ小型プラスチック容器に入れ、40℃、75%RHの恒温槽にて保存した。経時にハードカプセル剤の臭いを、健常成人男子6名によって、検査した。評価基準として、保存前と比べて変化無し：0、ほとんど同じ：-1、やや臭いがする：-2、かなり臭いがする：-3、非常に不快な臭いがする：-4、とした。結果を表2に示す。

【0058】

【表2】

表2 保存後のハードカプセル剤の臭い

例番号	評価
実施例4	-1
実施例5	-1
比較例4	-3
比較例5	-4

【0059】40℃、75%RHに72時間保存後の状態は、表2の通り、実施例4および5では、それぞれ、カプセル基剤特有の不快な臭いは認められなかったものの、ラベンダー由来、ペパーミント由来の臭いが若干感じられた程度であり、判定結果としては、いずれも、-1（ほとんど同じ）という結果であった。

【0060】一方、比較例4では、カプセル基剤特有の不快な臭いの発生は認められなかったものの、ラベンダー由来の臭いが認められ、判定結果としては、-3（かなり臭いがする）であった。また、比較例5に関しては、カプセル基剤のゼラチン、およびペパーミント由来の臭いが相俟って、異臭と感じられ、判定結果としては、-4（非常に不快な臭いがする）であった。

【0061】

【発明の効果】本発明によれば、カプセル剤を製造する際に、カプセル基剤として、従来のゼラチン等の代わりに、ブルランを基剤とするカプセルを使用することによって、カプセル基剤特有の臭い、および充填される成分の臭いの発生を抑制することができる優れたカプセル剤、揮発性物質の揮発を抑制することができるカプセル剤を提供することができる。

フロントページの続き

(72)発明者 鳴島 真人
神奈川県横浜市戸塚区上品濃12番13号 株
式会社ファンケル中央研究所内

F ターム(参考) 4B018 LE01 LE02 MD48 MD55 MD59
MD61 MD64 MD67 MD69 MD80
MD88 ME14 MF08
4B035 LC02 LE07 LE12 LG12 LG23
LG25 LG27 LG28 LK04 LK14
LP36
4C076 AA53 BB01 DD41 DD43 DD66
EE30 EE31 EE36 EE37 EE38
EE41 EE42 EE53 EE56 EE58
FF27 FF35 FF36 FF51 FF52
FF63 FF65